

R4 地域協働研究 (ステージ I)

R04- I -29 「服地としてのホームスピンの素材価値に関する調査」

課題提案者 (株)クラシカウンスル

研究代表者 盛岡短期大学部 佐藤 恭子

研究チーム員 齋藤 愛 (盛岡短期大学部)、鈴木 宏子・木村 敦子 (株)クラシカウンスル

〈要旨〉

本調査では、岩手の手仕事、手紡ぎ手織りの毛織物「ホームスパン」について、服地素材としての可能性を探るため、服地の制作、仕立て、流通の現場を調査し、服地の性質や課題を抽出した。調査ではまず、服地制作に必要な高い技術と高価格を裏付ける性質を明らかにした。また、後継者確保の課題対策のひとつとして新規開拓が挙げられるが、広く宣伝していく上で必要な基礎情報として、服地の加工に関する扱い方、需要の現状などをまとめた。

1 研究の概要 (背景・目的等)

今年3月の東京コレクション23/24AWでは国内の優れた生地産地の技術や加工を取入れたブランドが目立った¹⁾。染色、織物をはじめ、ボタンなどの小物も含めた日本各地の手仕事デザイナーによる服作りに取り入れられた。近年の手仕事、日本製への原点回帰の動きを裏付けたショーであった。

今ではマフラーやショールなどの小物の生産が主流となっている岩手県のホームスパンも、もとは服地素材の生産にはじまった岩手の手仕事である。手紡ぎの羊毛を使った毛織物ホームスパンは、寒冷地ならではの風土にあった素材として県の地場産業にまで発達し国内唯一の産地となった。ホームスパン産業は、高価な仕上げ加工機械の整備など、県の支援を受け1960年代後半から80年代初頭まで服地生産量を大きく伸ばした²⁾。しかし、同時期日本のアパレル市場もまた成長期を迎えた。新素材の開発、既製服への移行、ブランド戦略など、消費者の心をくすぐる新しさや時代性に富んだアパレル市場は大きく拡大していった。

ファッション業界が大量生産時代へと向かい、消費者の多様な趣味嗜好を満たすファストファッション全盛期の2012年、県は80年にわたって継続した支援事業全てを終了した。国内衣料生産の構造の変化に加えてホームスパン服地の仕上げ加工の環境を失い、その後服地生産量は減少を加速させた。現在ホームスピンの服地生産は、2つの形態をとっている。均一な生地を求めるアパレルの受注に対応すべく機械を生産工程に取り入れつつ、手紡ぎ手織りの技術を活かした新時代のホームスパンと、伝統的な制作工程を守り手紡ぎ手織りの良さを活かした従来のホームスパンである。後者は愛好者の注文により支えられてはいるものの、日本の伝統的なものづくり産業全体が抱える後継者不足が課題となっている。現在、手紡ぎ手織りによるホームスピンの販路は、工房独自に行う展示会が主流である。手仕事を好み、ホームスパンにも造詣が深い消費者を捉えている手堅い販路だが、固定客を持たない若手職人にとって販路開拓への道は遠い。県やクラシカウンスルを中心に、ホームスピンの魅力を伝えるイベントや、県外百貨店へのポップアップショップ出店など、確実に広告宣伝を進めてはいるものの、広く周知できているとはいいがたい。生産の安定化を目指し、さらなる新規マーケットの開拓を見据えて広く宣伝していくことが望ましい。

しかし、ホームスパンが「高価格を裏付ける品質価値」を

有し、最先端な「サステナブルな性質」であることを理解することは容易なことではない。そこで本調査では、手紡ぎ手織りのホームスピンの服地の需要および素材価値について明らかにし、服地素材としてのホームスパンを広く周知するために必要な情報を整えることを目的として、ホームスピンの服地素材の性質、縫製時の扱い方、ホームスピンの印象や展望などを調査した。なお、本調査対象である「ホームスパン」は狭義の手紡ぎ手織りの毛織物を指している。

2 研究の内容 (方法・経過等)

(1) 服地に関するホームスパン職人へのヒアリング

今日のホームスパン産業における服地生産について、手紡ぎ手織りのホームスパンを制作する職人にヒアリング4件を実施した。うち1件は若手職人に服地の制作前後にヒアリングを行い、若手が抱える服地制作に関する課題を抽出した。

(2) 服地の扱いに関する仕立て職人へのヒアリング

ホームスパンを扱う婦人服仕立て職人へのヒアリングを2件実施し、衣服加工を行う上でのホームスピンの特性と、他の服地と比較した上でホームスパン服地の商品としての可能性についてそれぞれ聞き取りを行った。

(3) ホームスピンの紳士服を取り扱う店へのヒアリング

紳士服の仕立てには、生地の選定の他、フィッティングとデザイン、ディテールの提案が必要である。ホームスピンの服地によるオーダーを取り扱う服飾プロデューサーに客層や需要とホームスピンの可能性について調査した。

(4) テキスタイルデザイナーへのヒアリング

調査対象の工房および職人から提供していただいたサンプルをもとに、ウールのテキスタイルデザインに携わるテキスタイルデザイナーにホームスピンの魅力および今後の需要の可能性についてヒアリングを実施した。

(5) ホームスパン工房へのサンプル提供依頼

県内外のホームスピンの潜在的利用デザイナーへの調査のため、(1)の調査対象工房へサンプル提供を依頼した。

3 これまで得られた研究の成果

(1) ホームスパン職人の説明による服地の性質

ホームスピンの服地は幅78～80cm前後で、工房により差は

あるが4.5～10万円/mが相場となっている（要尺：ジャケットは約4m、コートは約5m）。制作工程で最も時間を要するのは、糸の制作であり、熟練者か否かにもよるが糸紡ぎだけで1か月近くを要するのが平均的である。並行して他の受注をこなしながら、洗毛から仕上げの縮絨に至る全工程が終了し、服地が完成して注文者の手に渡るまでには、最低でも2か月はかかる。

生地の販売の主な方法は、工房が行う展示会での販売や個人客から直接受けるオーダーのほか、県内の工芸品店などが仲介をしている。工房は見本帳を用意しているが、見本帳どおりのものだけでなく、客の要望に応じて色や織組織、風合いの変更も話し合いながら請け負う。ホームスパン職人が仕立てのデザインに介入することはほとんどないが、ホームスパンは、仕立て直しをしながら長期間の使用に耐えうる丈夫な素材、高価ではあるが、若いうちに手にして長く着てもらうのが理想とのことである。

服地購入者は、手仕事のストーリーを嗜好する人、洋服好き、民藝を好む人が多い。また購入者にはリピーターも多い。男性はジャケット、次いでコートを、女性はコート用の生地の注文が最も多い。熟練職人には、全国から注文が入る。

服地の性質としては、マフラーやショールと比べ、ウールの種類や撚りの強さを変える。男性用は撚りをしっかりとける。特に身体の可動域の大きな箇所では、男性物の方が女性物より力がかかるため、強化する必要がある。服地のための糸づくりと機織には熟練した技術を要する。また受注に応える羊毛の入手も選定する力を要するほか、安定した確保も容易なことではない。若手職人が、クオリティの高い服地を制作するには、経験値を上げることに加え、多くの評価を受ける必要があるが受注を取ることは簡単なことではない。

ホームスパンの特性として、客だけでなく、仕立て職人や、アパレル関係者からも、「手紡ぎ手織り」であることは驚かれることが多く、「糸づくりから要望できるのが岩手のホームスパンの希少性」であるとのことである。

（2）仕立ての際のホームスパンの服地の扱いについて

ホームスパンによる仕立て服のデザインは、通常の仕立て服と同様、客の要望に合わせて仕立て職人がデザインを提案しながら決定されることが多い。ホームスパンの服地の幅は一般的な服地の幅より狭いため、織幅によってデザインが限られてしまうこともある。

ホームスパン素材の扱いについては、多様な衣服素材のなかの一つであり、先入観なく真摯に研究し相応しい方法で地直し、芯貼り、縫製の作業を進めることに変わりない。手紡ぎ手織りのホームスパンを一括りにすることはできず、紡ぎの強弱、織り密度が異なれば別の生地でありそれぞれに良さがある。素材を見定めて縫っていく。しかし、扱うためには、ある程度多様な生地に触れた経験は必要であり、難易度は高い生地といえる。特にホームスパンの特徴は風合いである。型崩れをしない服作りは基本ではあるが、芯を貼りすぎること風合いを損なわないよう、また、ピリングを起こさないよう、芯の種類、貼る位置や面積には注意する。

ホームスパン服地の可能性については、染色や織りに個性や工夫があることが買い手に伝えられればよいのではない

か、「牧歌的」なものを好む人がホームスパンに惹かれる傾向があり、原毛の良さ、羊の質感を活かした服地はどうか、仕立て直しだけでなく端材による構造的なデザインやリメイクなどの服地の再利用を進めることで、高価なものに手が届かない若い潜在的顧客層へホームスパンを広くアプローチすることも可能なのではないか、などの案が示された。

（3）ホームスパン服地による紳士服について

ホームスパンで仕立てを希望する客は3タイプに分けられる。多い順に①ハイブランドに提供している素材だから、②服が好きでインターネット、雑誌などがきっかけでホームスパンという素材に興味を持ったから、③ホームスパンの持つイメージ（手仕事、宮沢賢治など）に興味を持ったからである。

仕立ては縫製工場に依頼しているが熟練職人の服地であれば問題なく加工できる。むしろ手紡ぎ手織りの服地は糸密度がしっかりしている。

また、ホームスパン服地の今後については、人気のハリスツイードは固く馴染みにくいがホームスパンは初めから馴染みやすいなどの長所がある。紳士服地の場合は、本場英国のデザインを意識していくなど、民藝の色柄を離れて時代性を意識した新しい生地を研究することで可能性が広がるだろうとのことであった。

（4）テキスタイルデザイナーによるホームスパンの服地

ケンプ風の糸が今日では珍しい、ストーリー、エモーショナル感を持つ素材である。テキスタイルのデザインにおいて機械生産には限界がある、ホームスパンは、機械に近づけるのではなく、機械では作れない表現、番手、糸と糸との間の感じ、むら感、太さ、色の表情が出るものを作してほしい。

4 今後の具体的な展開

ホームスパンは服地として特別に扱いにくい素材ではなく、今後デザイナーなどへ向けた新規開拓において支障はないが、生産性を考えると需要だけを求めることはできない。価格、性質を踏まえると、宣伝次第で客の気持ちを捉えられるアパレルのような衣料品とは一線を画した工芸品といえるであろう。近年のデザイナーは日本のものづくりへの回帰の動きがあるが、ストーリー性を重視しホームスパンに関心を示す若手デザイナーは一定数いる。本調査ではクリエイターへのヒアリングが不十分であったが、今後は、ホームスパンに関心を持つデザイナーへの調査をしていきたい。

謝辞

本調査においてヒアリングにご協力いただいたホームスパン職人、仕立職人、服飾プロデューサー、テキスタイルデザイナーのみなさまに深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 読売新聞オンライン「23～24秋冬東京コレクション、伝統の手仕事で日本らしさ」2023年3月23日、<https://www.yomiuri.co.jp/life/20230322-OYT8T50146/>（閲覧2023/6/30）
- 2) 菊池直子「12.岩手県のホームスパン」『繊維製品消費科学』55号 2014 p.604-607